

1 認知症とはどんな病気

脳の器質性障害により認知機能が低下し、日常的な生活に支障が出る病気です。

認知症には「アルツハイマー型」「血管性」「レビー小体型」「前頭側頭型」の4大認知症があり、患者の約6割はアルツハイマー型と診断されています。その他、認知症の原因になる病気はさまざまです。

認知症は発症の10年前から兆候が起きているといわれています。本人や家族でも気づきにくい兆候が積み重なって、最終的に認知症と診断されるまでに至ります。もし、少しでも普段とは違うと感じたら病院や施設に相談してみてください。

2 現れる症状

新しいことが覚えられない、同じことを何度も言ったりする、同じものを何度も買ってくるなど、記憶障害が早期に現れます。私が独自におこなったアンケートによると、家族が気づいた症状として「置き忘れやしまい忘れ」「繰り返し行動」などが多く回答されました。このような症状が進むと、月日や季節、住所や知人の顔もわからなくなります。



福岡県認知症医療センター
見立病院
まつもとひであき
松本秀章 医師

病気と認知 正しく知ること

高齢化が進むにつれて増加している認知症。もはや他人事ではない「脳の病気」について、その症状や患者への接し方などを、認知症サポート医である福岡県認知症医療センターの松本医師に伺いました。

その人本来の性格や周囲との関わりなどが影響して起きる症状として、暴言・暴力が出たり、幻視・幻聴があったり、物を盗られたかと思ひ込んでしまう行為などが挙げられます。これらの中でも、家族や地域の接し方次第で大きく改善されるものもあります。徘徊したり、排せつが上手くできなかったりするなど介護する家族に大きな負担のかかる行為が出てくると、在宅で看るのは困難になります。

3 患者の気持ちは

自分の気持ちを受け入れられたいという願望を持ち、安心を求めます。また、思い通りにならないことに対する我慢力が低下し、自分のペースを守ろうとします。環境の変化に敏感に反応したり、周囲の愛情に微妙に反応したり、プライドがとても傷つきやすくなります。

4 患者との接し方

心がけたいのは、やさしく接すること。自尊心を傷つけないことや、相手の視野に入って話すことが大切です。今までできたことができなくなっているのは本人です。感情やプライドは残っているので、共に行動しながら愛情を持って接してください。

改善された事例もあります！

- ▶ 活気が出てきた・趣味を始めた
- ▶ 暴力や暴言が少なくなった
- ▶ 同じ質問をする回数が減った
- ▶ 夜間の徘徊が減った

5 在宅介護をしている家族へ

介護のベテランはいません。上手くできなくて当たり前。一人で抱えこまずに、相談や愚痴を言える場所や人を探してください。同じ境遇にいる介護仲間との意見交換も良い機会になります。町には包括支援センターなど相談施設や専門施設があるので、早めに頼ってください。徘徊かいたす、排せつなどの問題があると、在宅介護はたいへん困難です。この場合は無理せず、入院・入所を検討することをお勧めします。介護する側にも生活があります。すべてを犠牲にする必要はありません。あなたのペースを守って、自らの健康にも気を付けてください。

「あれ？」と思ったら、まずは相談を。

思い当たることはありませんか。 認知症気づきのチェックリスト

- ☐ 曜日や月日がわからない
- ☐ 物を盗られたという
- ☐ 買い物ができない
- ☐ 料理ができない
- ☐ 同じことを言ったり聞いたりする
- ☐ 最近のことを忘れる
- ☐ よく知る人の顔がわからない
- ☐ 会話で言いたい言葉が出てこない

福岡県認知症医療センター（見立病院）

- ◆ 電話 46-2164
- ◆ 相談時間 月～金曜日
午前8時30分～午後5時30分
- ◆ 受診時間 月～土曜日
午前9時～正午



糸田町長
佐々木淳

平成28年1月末現在、町の高齢化率は33%を超えていて、今後ますます増加する見込みです。この高齢化が進むにつれて課題となっているのが「認知症」。記憶障害や徘徊など、初期から重度まで症状は人それぞれです。誰もがなり得る病気であり、発症しないように予防する必要があります。町では、社会福祉センター内に地域包括支援センターを設置しています。相談・支援に専門の職員が応じますので、気軽に利用してください。また、各種予防教室や講座、人材バンク教室での健康体操や料理教室なども開催しているので、ぜひ参加してみてください。予防はもちろん、地域や行政、各家庭など、それぞれの立場で役割を確認し、地域全体で取り組んでいくことで健康な人を増やしていきたいと思っています。ふるさと糸田で、みなさんが笑顔で暮らしていくために認知症への理解を一緒に深めていきましょう。

認知症アンケート

●介護者の悩み

- ❖ 症状の経過がわからない
- 悪化したときの対処法がわからない
- 伝えたいことが伝わらない

●介護している人

- ❖ 37% 娘
- 18% 息子
- 13% 妻

●患者年齢別

- ❖ 45% 80～89歳
- 34% 70～79歳
- 9% 90～99歳



松本医師が外来患者373人に実施したアンケート結果より一部抜粋